▲祖父・一男さん。今でも、一弘くんがぶつかり稽古をしていた電柱が残っている（自宅横）

▲１歳のもちふみをする一弘くん。保育園のころまでは、特に体は大きくなかった

▲一番上の兄（写真後ろ）が走り幅跳びで全国大会に出場するため、東京へついていった小学３年生の一弘くん（写真前）

「ぼくの将来の夢は、相撲界にはいって、相撲とりになることです。そして、武双山や土佐ノ海や琴錦や魁皇のようになりたいです。そして横綱になって、明治神宮で土俵入りをしたいです」。

そして、小学校卒業後は、全寮制でスポーツの盛んな中学高校一貫教育の明徳義塾（高知県）への入学を決心します。

明徳での中学高校時代

入学して1週間。家族はフェリーを乗り継いで9時間かけて一弘くんの生活を見に行きます。そこでは、これまでとは全然違う厳しい練習をする一弘くんの姿がありました。あまりの厳しさに「一弘、もう帰ろい」と一男さんは声を掛けました。しかし、一弘くんは「ここでがんばる」と意志は固かったそうです。それから高校卒業までの6年間、一度も「帰りたい」と家族に話したことはありませんでした。たまに送ってくる「菊次一男様・御一同様」と書かれた手紙にはいつも学校での生活に「わくわくしている」と書かれてありました。

中学3年から高校の相撲部と一緒に練習するようになります。そのころモンゴルからやって来たばかりの高校3年生の朝青龍関がいました。今は横綱となった朝青龍が日本に来て初めて稽古した相手が一弘くんでした。1年間、先輩の胸を借り一弘くんも成長。今でも兄弟のような付き合いが続いているそうです。

中学3年から高校3年までの4年間、毎年5月の連休中に、菊次家に明徳の相撲部が合宿するようになります。稽古場は「雲龍の郷公園」にある相撲ドーム。近所からもこの相撲の稽古を見ようと大勢の人が訪れていたそうです。また菊次家にも炊き出しなどの手伝いに、近所の人がたくさん来ていました。初めて日本の家庭的な空気に触れた朝青龍はとても喜び、一男さんに「日本のふるさとを菊次さんにしていいですか」と話したほどでした。

一弘くんは中学3年生のとき全国大会で優勝。高校生のときは選抜高校相撲、国民体育大会相撲競技、高校相撲新人選手権、高校相撲東西対抗、世界ジュニア相撲選手権大会など7つの全国大会で優勝し、「怪童」と呼ばれるようになり、相撲界の注目をあびるようになります。

相撲が強かったこと、そして人から好かれ信頼されていたことから、高校3年生のときは生徒会長に推され、引き受けました。

そして、卒業を控えた高校3年生の12月、佐渡ヶ嶽部屋に入門することになります。ほかにも大学やいくつかの相撲部屋から誘いが来ました。しかし、子供のころから佐渡ヶ嶽親方からかわいがってもらい、恩を深く感じていたことから決心が揺らぐことはありませんでした。

プロの力士として

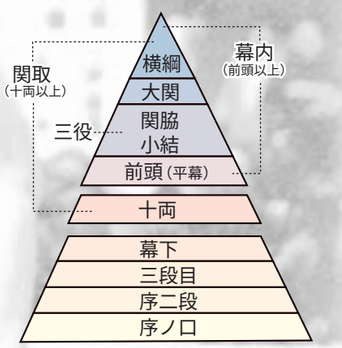
入門して翌年の平成14年1月の初場所で初土俵。前相撲では3勝0敗と順調なスタートを切ります。場所ごとに勝ち越し、序ノ口、序二段、三段目、幕下と番付を上げていきます。そして20歳になった昨年5月の夏場所で4勝3敗と勝ち越し、十両昇進を果たします。

この年の8月に地元で後援会が発足。発足式では琴奨菊関に化粧廻しが贈られます。15日間の本場所で白星が続くよう、そして横綱雲龍を目指してがんばれとの気持ちを込め、15個の白い菊の花の中を大和町祇園の大蛇が昇る姿を、大坂間貢さんがデザインしました。

後援会では、本場所で琴奨菊関が勝った日の夕方6時に花火を上げて、勝ったことを市民に知らせています。

十両を3場所で通過し、同年12月に前頭16枚目の幕内力士に昇進します。福岡県の幕内力士としては、大関魁皇関以来12年ぶり、明徳義塾相撲部始まって以来、日本人としては初めての幕内力士となりました。

■力士の格付け



▲明徳義塾高校相撲部の仲間。1年生の一弘くんは左から2番目。右端にはモンゴルから来た２つ先輩の朝赤龍関（現在前頭12枚目）もいる

内力士となりました。

今年1月の初場所では負け越していったん十両に落ちますが、次の3月の春場所では13勝2敗で十両優勝。4月に再入幕を果たします。その後幕内でも順調に勝ち星を重ね、9月場所では自己最高位の幕内6枚目に格付けされ、横綱や大関陣と初めて取り組むことになります。結果は7勝8敗と負け越しましたが、すばらしい取組を見せました。

祖父・一男さんは言います。「入門して4年。ここまで上がるとは思いませんでしたよ。でも私はこれまで一弘を一度もほめたことはありません。私が厳しいことは本人が一番知っていますから。これからが本当の勝負。出るときは真っ直ぐ、稲穂と同じように実の付くときは頭の下がるように。人の痛みの分かる、しっかりした人間になってくれるのが私の願いです」。

琴奨菊関の母校・東宮永小学校では、琴奨菊関が相撲取りになるまでの歩みを、5年生の道徳の時間に取り入れています。琴奨菊関が努力して夢をかなえたことを、ビデオや教材を使って学ぶことで、子供たちは琴奨菊関から「がんばる力」をもらっています。

7月には市の観光大使にも就任した琴奨菊関。「九州場所では勝ち越せるよう、一番一番を集中して取っていきたい」と、今場所への意気込みを話します。これからも柳川期待の星、琴奨菊関を応援していきましょう。

▲小学６年生のときの卒業文集。相撲取り、そして横綱への夢がつづられている

地元から応援してるよ

琴奨菊後援会会長
立花 寛茂さん（新外町・65歳）

まじめで稽古の熱心さは角界の多くの親方が認めています。私たちも一生懸命応援しますので、次代のホープとしてがんばってほしいです。（商工会議所会頭）

小学生のころの指導者
堤 浩喜さん（明野・72歳）

学校が終わってから毎日２時間、私もまわしを締めて指導に当たりました。言ったことは素直に聞く子供でした。（県相撲連盟柳川山門三池支部長）

琴奨菊後援会事務局長
牟田口 清さん（瀬高町・64歳）

すばらしい師匠、ライバルに恵まれたことに感謝しながら、今からも、いばらの道は続くだろうけど、負けずにがんばってください。（市教育研究所所長）

小学1、2年生のころの担任
今村 芳紀さん（筑紫町・49歳）

当時から体が大きく、2年生の終わりごろは私の体重（50kg）と同じくらいではなかったでしょうか。「気は優しくて力持ち」でしたね。（中島小学校教頭）

同級生
山田 修さん（佃町）

サッカーや野球などしてよく遊びました。学校では一緒に相撲の練習をしてましたけど勝てませんでした。今でも電話をくれたりするのがうれしいですね。

同級生
田中 恵美子さん（佃町）

保育園のころから一緒でした。小さいころから正義感が強く友達思いでした。九州場所では、「かっくん」らしい前に進む相撲でベストをつくしてほしいです。